

第十二話

紀淑人任国下向事付賊徒回忠事

『前太平記』上 卷第二 四十一頁から四十三頁より

そうこうしているうちに、淑人は家臣の波多野清氏・常盤守国をお呼びして、仰ったことは、「私はもったいなくもこの選抜にあずかる、現在のこの名誉は、末代

「我苟も此撰に預かること、 当時の佳名、

までの大きなもので、何をもってこれに及ぶだろうか。思うところ、賊徒は大勢で

末代までの規模、 何を以てか之に如かん。

あるので播磨備前の辺りに陣を張って、互いに阻み合うか、そうでなければ宇多津・今張の港で防衛するか、どのようにしても海路での合戦があるはずなので、

何様にも海路にての合戦あるべきなれば、

失敗による世間からの嘲弄は一族の過失であろうから」と言って、楯を作らせ、矢

不覺しては天下の嘲哂、家の疵瑕たるべければ」

じりを研がせ、合戦の用意を整えた頃には、三十日余りを経過して、四月十二日の早朝に都を出発し、渡辺神崎で出船の用意をして、四月十六日に船出の追い風を得て、伊予国へと出航する。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にしていただいて結構です。※※※

翌日の十七日の朝風の中、晴れ渡るままの霧間から、とおく播磨国明石の方を眺めると、これこそ、賊徒の軍船と思われ（る舟があつ）て、取舵面舵^(老)いっぱい

取舵面舵に

に、搔い楯^(式)を連ねて、色とりどりの旗を立てた舟を二三百艘、舟の側面をこすり

搔楯搔いて、

舷を輾り

合い、舟の後方と前方を並べて支えていた。まさに「それ敵だ」というときに、味

艦舳を双べて支へたり。

方の軍勢は、我も我もと、矢を束ねる緒をといて、素引きをして待ち受けた。この

味方の軍勢

我も我もと矢束ね解いて、

空引きしてこそ待ち懸けたり。

ようにしていたところに、小舟が一艘、国司（淑人）の舟目がけて、波を押し分けて、漕いで近寄ってくる。人々は不審と思っているところに、間がすぐ近くになったところ、舟の中から小具足を付けている男が出てきて、舟の側面に立って申し上

舷に立つて申しけるは、

げたことは、「そこへいらっしゃるのは、伊予国への討手と思われます。あそこに見えます、明石勢の中から大將軍に申し入れたき旨があつて、参上いたしました」と、声高々に申し上げた。淑人の執事の常盤守国は、舟の舳板（和舟の舳先に横に渡した板）に立って、事の詳細を問う。その男が申し上げたことには、「そもそ

も、今回純友の元に従い、徒党を組んで、多くの人を率いて、悪事を働くことは、

今度純友が手に属し、 党を立て 衆を擁して 狼藉に及ぶこと、

決して朝廷を滅ぼし申し上げようとの計画ではない。また、純友は長年情けをかけ

努々朝家を傾け奉らんとの謀に非ず。 又純友多年恩顧の者にも非ず。

たものでもない。ほんの一度の召集に従い、少しの間の命を助けるためでございます

只一旦の催促に随ひ、 旦暮の命を資からん為計りにて候。

す。国司のご入国の次第をもって、一所懸命の土地を与え管理する（させてくれ

国司の御入国の序を以て、 一所懸命の地を下し預からんに於いては、

る）ようであれば、どうして弓を引き矢を放って、ご下向の航路を邪魔しましょう

争でか弓を引き発つて、 御下向の海路を遮り候はんや。

か。この次第をもって、ふさわしいご推薦にあずかりとうございます」ということ

此旨を以て 宜しく御吹挙に預かり度く候」と

を、丁寧にしあげた。守国は嘲笑して、「今お前が申し上げるところは、一理あ

慇懃に申しけり。

ると思えるといっても、まさか真実であるとも思えない。騙して考える計画に誘い

出し抜いて思ふ図に呼引き入れ

て、

込んで、前後から挟んで、気持ちよく戦をしようとの計画、すでに一言の元にあら

前後より挟んで

心よく軍せんとの謀、

はや言下に顛はれたり。

われている。降伏を望むならば、弓を隠し、甲を脱いで、御舟を通して参上しろ。

所領までは思わず（思わないが）、命だけは、この守国が申しあずかってやろう」

所領までは思ひ寄らず、

命計りは

守国申し賜つて取らせん」

と、荒々しく申し上げたので、その男は何度も嘘がないとの旨を、強く弁明し申し上げるによって、淑人が許して、すぐに「当方に従い、軍忠に勤しむがいい。功績があれば、小さな恵みを手配しよう」と申し含めなされたところ、使いは喜んで帰った。それから後は、まったく邪魔する者もいなかったもので、航海は無事に四月二十日の暮れ方に、伊予国にご到着なさる。純友はこうなっているとも知らず、今回の討手は明石へ大勢を差し向けたので、きっと防ぎとどめているだろうと、ゆったりと（刺客を）あてにして、そこまでの用意もしないのだった。

大様に憑んで

さまでの用意もせざりけり。

注釈

※壺・取舵面舵……舵の取り方。取舵は左へ。面舵は右へ。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

※貳・搔い楯……防御のために楯を並べて垣のようにしたもの。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2015/6/5

改訂：2021/3

海熊童子

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※